

ムーンショット型研究開発制度に係る戦略推進会議（第一回）

議事概要

日時：令和2年7月29日（水）10：00～12：00

場所：中央合同庁舎第8号館623会議室（ウェブ会議）

出席者

〈座長〉

平 将明 内閣府副大臣

〈座長代理〉

今井絵里子 内閣府大臣政務官

〈有識者〉

江田麻季子 世界経済フォーラム日本代表
郷治 友孝 一般社団法人日本ベンチャーキャピタル協会常務理事
株式会社東京大学エッジキャピタルパートナーズ代表取締役社長
近藤 達也 内閣官房健康・医療戦略室健康・医療戦略参与
一般社団法人Medical Excellence JAPAN理事長
独立行政法人医薬品医療機器総合機構名誉理事長
須藤 亮 一般社団法人産業競争力懇談会専務理事／COCN実行委員長
内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション担当）付政策参与
SIPプログラム統括
橋本 和仁 総合科学技術・イノベーション会議議員
国立研究開発法人物質・材料研究機構理事長
吉村 隆 一般社団法人日本経済団体連合会産業技術本部長

〈政府側〉

松尾 泰樹 内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション担当）
佐藤 文一 内閣府大臣官房審議官（科学技術・イノベーション担当）
堀内 義規 内閣府大臣官房審議官（科学技術・イノベーション担当）
渡辺その子 内閣官房健康・医療戦略室次長
梶原 将 文部科学省大臣官房審議官（科学技術・学術政策局担当）
増子 宏 文部科学省大臣官房審議官（研究振興局及び高等教育政策連携担当）
大坪 寛子 厚生労働省大臣官房審議官（危機管理、科学技術・イノベーション、国際調
整、がん対策、国立高度専門医療研究センター担当）

菱沼 義久 農林水産省農林水産技術会議事務局長
萩原 崇弘 経済産業省大臣官房審議官（産業技術環境担当）
山本 和徳 経済産業省商務・サービス政策統括調整官

（オブザーバー）

上山 隆大 総合科学技術・イノベーション会議常勤議員
元政策研究大学院大学教授・副学長

（研究推進法人（FA））

古賀 明嗣 JST 挑戦的研究開発プログラム部長
山田 宏之 NEDO ムーンショット型研究開発事業推進室 室長
綱澤 幹夫 BRAIN 新技術開発部審議役
釜井 宏行 AMED 研究開発統括推進室 次長

（プログラムディレクター（PD））

山地 憲治 NEDO（目標4PD）
公益財団法人地球環境産業技術研究機構 副理事長・研究所長
千葉 一裕 BRAIN（目標5PD）
東京農工大学 学長

< 議事概要 >

（1）開会（挨拶／自己紹介）

冒頭、平副大臣から挨拶後、構成員（有識者等）から自己紹介。

（2）戦略推進会議の趣旨・進め方等

事務局から資料2に基づき、戦略推進会議の趣旨・進め方等について説明。

（3）目標4における研究開発の進め方等について（非公開）

NEDOから資料3に基づき説明後、質疑応答。

< 質疑応答 >

郷治氏 このムーンショットは、名前のとおり、長期的なインパクトというのを目指しながらも、ただ、2050年とか2030年に蓋を開けてみなければ分からないということになると非常に不安。この図にあるとおり、出発してから短い期間であればあるほど

このベクトルが高いほうに行っているように、採択後の最初の見極めは非常に大事なのかなと思う。この採択が実際にされた後、資料3の20頁の支援体制の方々、特に山地先生を中心とするPDの周りのサブPDの方々が、どのように各プロジェクトの進捗を計っていくのか。ビジネス的にいうとKPIということになるが、研究開発だとKPIという言葉が良いか分からないがどういう物差しで測るのかというところは、私は別に3年も待つ必要もないと思う。1年目でも、かなり見込みのあるものかそうでないものかというのははっきり選別していかなければいけないと思う。このあたり、どのように運用されていくのか教えていただきたい。

山地PD 1つは革新技术へのチャレンジなので、技術に見込みがあることを見つけなければいけない。このため、それぞれの領域に、私以上に詳しい専門家を割り当てようとしており、まず技術の進展を比較的早期に、これは見込みがあるかどうかを見極めていこうと思っている。

それとともに、最終的にはやっぱり社会実装していくので、この部分については、産業界の有識者の意見を参考にして、本当にどうやって産業化に持っていけるのか、技術的に成立するかどうか見極めた上で、本当に産業化していくには何が問題なのかというところとリンクさせる仕組みを、先ほど御紹介した組織や体制をつくって、進めていこうと考えている。

郷治氏 どうやって進捗の見える化をするのか。

山地PD 1つはデータマネジメントを使っていければ良いと考えている。

郷治氏 ぜひ採択後に見える化の進捗などを教えていただければありがたい。

吉村氏 今の郷治氏の話と少し近いところがあるが、ムーンショット自体、研究開発の戦略的な推進とともに、研究開発成果の実用化の加速と書かれている。それで、今日御説明いただいた技術的な話は非常に野心的で興味深いものが多く、実際、社会実装という話が出たときに、特にムーンショットの中では地球環境再生のような話に焦点を当てており、ここが非常に期待される。それとの関係で考えると、単に技術が良いから社会に入るというわけでもなく、ELSIに訴えれば入るといってもないと感じている。こういったものを研究開発して新しいものを生み出すとともに、それを使っていくための経済的なインセンティブや経済性とか、それからそもそも今行われている経済活動自体のサーキュラーエコノミー化のような話も出る中で、ビジネスモデル自体を変えていくなど、そういう話を併せて議論していただくのを付け加えたほうが、この先の社会実装につながっていくように思う。そういったことは、このプロジェクトの射程には入っていないということになるか。

山地PD 実際に社会実装に持っていくためには研究開発から世の中へ普及させていかなければいけない。市場を持たさなければいけない。だから研究開発といっても社会実装を目指しているので、その中でライフサイクル評価も含めて、実際に効果があり、かつ市場での競争力を持ち得るか、そういうことを評価していく。ただ、ムーンショット

はまず5年で、最終的に10年だが、10年のところの目標はパイロットプラントであるので、そこに至る前に社会実装が見えてくると良いが、まずはそこまで持っていくというのは、研究開発のプロジェクトであるムーンショットの基本的な役割だと思っている。その後、社会に実装していった普及させていくためには、色々な政策的な支援が必要な場面があると思っているが、そこはまた別の機能で補っていくべきではないかと考えている。

吉村氏 ムーンショット自体で射程に置いているものは、そういう理解と同じということであれば、特に付け加えるものはない。なるべく良いものが社会にうまく入ったら良いなという期待も込めて質問をさせていただいた。

佐藤審議官(内閣府) ぜひ制度的なものなど必要というのがあれば、ぜひ実施団体のほうからも御提案いただければ、省庁としてもしっかり受け止めたいと思っている。そういう検討も含めてやっていただくことが良いと思っている。

平座長 NEDO自体にそういう知見があると思うが、NEDOは本来業務としてやられると思うが、それで良いか。

山田氏(NEDO) 御指摘のとおり、NEDOとしても、そこは注力したい。また、先ほどご説明したPD支援体制の中には固定しないメンバーも入れて、我々のマネジメント体制も環境変化に対応させながら社会実装の実現を目指すということを考えている。先生方の御指摘を反映させながら、ぜひそこを強力に推進したい。

橋本氏 このようなプロジェクトは、実用化、社会実装ということを最初に言うと、非常に小さく固まってしまう。そういう意味では、最初から実用化とかいうことはあまり言わないで、しっかり研究をやることが大変重要だと思っている。

一方で、本当に研究だけで終わる研究もあるし、吉村氏がおっしゃったように、最初から分かるような部分もある。だから、その辺は山地先生の経験を基にエクスクルードしていくかと思うが、この分野にかかわらず、2050年という随分先のイメージの公募をすると、そこに出てくる提案というのは、非常に荒唐無稽のどうしようもないものか、あるいは過去ずっと研究をやられて達成されていなくて、うまくいったものは報告されるが、うまくいかなかったものは文書とかに残っていないので、全く同じようなことが同じように提案されてくるということが非常に多い。

実は最初に言ったことと矛盾するかもしれないが、あまり早い段階から実用化、要は社会実装ということを使うと小さく固まってしまうが、かなり早い段階から、これは無理だ、あるいはこれは昔からやっているものと同じではないかというのは、見極めはできている。

実はこの話は大変難しい。この分野といっても、非常に広いところをカバーするので、この分野の専門家と言われても、例えば私と山地先生は同じではない。近いところにいるが、実は知識は、大分、山地先生と私は違う、というように広い。学問はかなり縦割りにされている部分があるので、山地先生はよく分かった上でマネジメントされると

思うが、どのようにお考えか。

山地PD 採択候補案を選ぶところで、そのあたりは十分に考えている。その上で私が考えるのは、ポートフォリオのマネジメントの図が大事だと思っている。今回この中でも何とかなるかもしれないと思うものを選んで、競争させて、いいものは育てていこう。それ以外のものはほかのところで使えるかもしれないので、スピンオフさせていくとか、そういう絞り込みをしていくのが、これからの私の役目だと思っているので、橋本先生のコメントを踏まえて進めてまいりたい。

須藤氏 このプロジェクト、もともとクールアースとクリーンアースという、2つの大きな目的でスタートして、非常に範囲が広いが、この中で、今の御説明でかなり対象をいろんな観点から考えて絞られたということは、これは非常に良いことである。私も賛成している。その中で、クールアースのほうで、CO₂のダイレクトエアキャプチャー、窒素循環と、大きく2つのテーマがあるが、窒素循環が重要な部分というのは私もよく分かるが、CO₂のダイレクトエアキャプチャー自身、とても難しい技術であるし、さらにコスト的にも将来どうなるかという課題が多い。我々産業界としても本当に期待している技術なので、できればこのCO₂のダイレクトエアキャプチャーのほうに集中したほうが良いのではないかという意見が色々出てきていると思うが、それをあえて窒素循環を入れて2つを走らせるという、その辺の御判断をした経緯を教えてください。

山地PD 資料3の22頁のスライドのところにCO₂の回収とあるが、これは基本的にダイレクトエアキャプチャーである。大気まで行かずに屋内程度の濃度のものをチャレンジしながら進めていくというものもあるが、基本的にはダイレクトエアキャプチャーとして色々な技術が入ったと思う。須藤氏の御質問のN₂O、あるいはメタンのところがあるが、これは基本的には農地由来である。農地由来で、メタンもN₂Oも農地から出てくる部分がかかなりある。そこを狙ったもので、特にこのスライドの一番上の案件である。だから、これは窒素のいわゆるプラネタリー・バウンダリーを超えないよという効果も含んでいる。窒素化合物と温室効果ガスはちょうど重なった境界にある。そういう意味でこれを取り上げたということで、基本的には、ダイレクトエアキャプチャーをメインに対応したというふうに、私は考えている。

須藤氏 ということは、ダイレクトエアキャプチャーと、特に一番上の東北大の窒素の話だが、この辺はある程度関係があるというふうにお考えになって、この分野を採用されたのか。

山地PD 相関があるというよりは、別物だと考える。農地の根粒菌など大気から窒素固定するものもあるが、ダイレクトエアキャプチャーというイメージで捉えたものではない。温室効果ガス削減と、それから窒素循環の無害化のところ、この両方の重なった領域のものということで採択候補としている。

江田氏 企業からの応募もあるが、最終的にはアカデミアの方たちのプロジェクトにな

っているように思う。先ほどから話題になっているが、どのようにこのビジネスに取り込んでいくのかということについて最初にやってしまうと小さくなってしまおうというのは、私も大賛成ではある。しかし、常に企業の中でのR & Dの方たちは、そういうことをお考えになりながらやっつけらっしゃると思う。なので、どこかで意見交換をする、あるいはそういった機会を柔軟につくっていただくと、アカデミアのみならず、いろんな視点でのアドバイスがもらえるのではないかなというのが実感である。そういったことは可能性としてあるか。

山地PD 先ほどの説明にあったように産業界との連携を図る。それから企業から応募があったが、結局、採択候補の中に残らなかったというのは、例えば、先ほど対象外としたマリンプラスチックの回収や、あるいは循環と違う新しい再生可能エネルギーの考え方、あるいは木の利用の促進など、今回のムーンショット目標4とコンセプトが合わないというところが、全部が全部企業というわけではないが、企業からの提案には多かったように思う。結果として、ムーンショットとして、野心的なチャレンジという意味では、やっぱりこうなってくるのは、ある意味自然かなとは思いますが、最終的に社会実装なので、企業との連携というのは非常に重要であると考えている。

山田氏(NEDO) NEDOからも補足させていただく。こちらのグラフで表現しているのでは、あくまでプロジェクトマネジャー(PM)の所属機関で、PMが率いる実施体制の中には企業が入っているプロジェクトも多数ある。そのような企業が入っているプロジェクトについては、PMがその企業との連携をしっかりとやっていることを確認していく。開始時点で実施体制に企業が入っていないチームについては、産業界の意見を取り入れられるような仕組みを加えていく。そのようなマネジメントに、NEDOも協力したいと考えている。

江田氏 企業だけではできないような、大きな話をぜひ実現していただきたい。

近藤氏 炭酸ガスというと、やっぱり我々から見ると基本的に植物プラントかなと思う。それから窒素に関しては、空中窒素、固定バクテリアなんて、頭にぱっと思い浮かぶわけで、そういうところの利用というのがあがるが、今、お話しいただいたような化学的なアプローチというのはぴんと来ないが、最も効率的な格好になっているのが一番良いのかと思う。

平座長 ムーンショットは、日本国政府も総力を挙げて成功させるために協力しなければいけない。各省から何かコメントはあるか。

萩原審議官(経産省) 非常に野心的な目標をそれぞれの分野ごとに掲げ、それからPDの方が切磋琢磨することにより、目利き力が高まるということが非常に重要。野心的な目標を掲げた予算投入により、研究者だけではなくて、目利きの力が上がっていくということを期待して、これらのプロジェクトを支援していきたいと考えている。

上山氏 データマネジメントは、科学技術基本計画も含めた科学技術政策のオープンサイエンスの文脈で、とても重要なプラクティスだと思っている。今回のデータマネジメ

ントはその中心的な試みとして、手探りをしながらプラクティスをやっていたきたい。知財委員会の中にデータマネジメント機能を付与するということを書かれているが、もう少し踏み込んだ形でマネジメントとして関わっていただけないかという希望を持っている。この点について、山地先生から一言いただければ大変ありがたい。

山地PD 私も、手探りだという感じは思っている。NEDOが進めていくということなので、むしろNEDOから少しお答えいただきたい。

山田氏(NEDO) 公募の段階から、データマネジメントの取組についてはしっかり取り組んでほしいということは、提案者のほうに伝えている。一方で、提案書の中で、このデータマネジメントをどのようにしていくのかということについては、やはり提案者ごとに濃淡があるので、今後、PMが決定した後、しっかりとPMとコミュニケーションをして、具体的なアクションにつなげていきたいと考えている。手探りの部分はあるが、PMとPDのマネジメントをつなげられるように、NEDOとしてもしっかり取り組んでいきたい。

上山氏 我々とする、とても強い関心を持っているので、よろしくお願ひしたい。

平座長 事務局にお願ひだが、目標4のような話をするとき、環境省など入れるとともに、ESGとかSDGsそのものなので、金融庁とかそういう関係者は入れるようにしてほしい。それでは、この議論はここまでとさせていただきたい。

ただ今、いただいた意見を踏まえて研究開発を進めていくということによろしいか。御賛同いただきたいがどうか(異議なし)。

(4) 目標1~3、5~6における公募・審査状況等について(非公開)

JSTから資料4-1に基づき説明後、質疑応答。

<質疑応答>

須藤氏 海外からの応募状況というのはどうなっているか。

古賀氏(JST) PMとしての応募はあったが、数は非常に限られている。また、PMの下にいる個別の研究者の中では、海外の方はたくさん入っている。

郷治氏 目標の1、2、3、6を拝見していて、バーチャルリアリティー、未病把握・疾患予防、AIといったテーマを扱っているが、私の仕事柄ベンチャーキャピタルをやっていると、常日頃から普通にこういったテーマで起業しようという研究者とお会いすることが多い。これらの目標は、本当に2030年とか2050年までかかるのか。むしろ順次実用化できるものは実用化していったほうが、より早く社会実装をできるのではないかと思う。ムーンショットとして研究開発している中でも早く実用化できそうなものが出てきたときに、3年たって初めてゲートウェイで評価するまで社会実装を待たなければならないのか。早く実用化できるものについては早くやっていっても、領域的には、特に目標1、2、3は、ヒットするものもあるのではないか。目標6については、確かに時間がかかるだろうと思うし、先ほどのNEDOのプロジェクトは中長

期的なものかと思うが、早く実用化できるものについてはどのようにされていくのか。
古賀氏（JST） これは、各PMから申請書を出していただいているが、やはりPMも
そういうことは考えており、最後に社会実装するだけでなく、途中途中で社会に持っ
ていけそうなものは持っていく。JSTもいろんな部門があるので、知財部門や産学連
携部門と連携していく。

郷治氏 JSTはベンチャーキャピタルもお持ちである。

古賀氏（JST） そういうところを、横串で支援する体制をJSTは構築することにし
ているので、バックアップしていきたい。

橋本氏 目標1、2、3については本当に動きの早いものなので、先ほどのものとは随分
状況が違う。なので、社会実装というか、ベンチャーなどにつなげていかなければいけ
ないと思う。そういう中において、JSTの体制がしっかり整っているのかどうかとい
うのは非常に不安である。これだけたくさん抱えて、しかも動きが早いものを
これだけ抱えて、それで研究者も今回たくさん関わってくる。この中において、かなり
JSTは頑張っていて、情報収集、コミュニケーションを研究者側とかなり取って行って、
それをJSTの中のベンチャーキャピタルに流すのもいいけど、こういうようなところ
に持っていくなど、色々な方の意見を聞いて仲介する役割を、JSTにかなり一生懸命
やっていただく必要があると思う。

そういう意味において、体制を整えているのか。長期的なプロジェクトは、まだ何と
かなるかも分からないが、今回のものは全然のんびりできないと思うが、そういう意味
での体制というのは、人を単に充てるだけではなく、それだけの人を割けているのか。
大変心配なので、あえて伺わせていただききたい。

古賀氏（JST） 各担当部門とは、このムーンショットの事業が立ち上がるところから
連携をしっかり取っている。昨年場合は目標を立ち上げるところで、CRDSが関わり、
今後は実際に研究が始まって、スピアウト等が出てくるときには、しっかり関連
する部門、また当部にネットワーク等を張って、JST全体で、あるいは経産省、NE
DOとも連携しつつ進めていきたい。

橋本氏 皆さんとしっかりとウォッチしていきたいと思うので、よろしく願いしたい。

佐藤審議官（内閣府） 今回のプロジェクトの一番の特徴は、JSTだけでやっているの
ではなく、NEDO、AMEDやBRAINも絡んでいること。2週間に1回ほど事務
的な打合せをしているので、JSTができなければ、それはNEDOにつなぐとか、そ
ういうことも十分やっていく。

平座長 JSTのほうで、本当にリソース足りないなら、正直に今のうちに言うておいて
いただきたい。後になって足りませんでしたということにならないようお願いした
い。必要があれば、こちらからサポートする。

近藤氏 私にとっては関心が深いのは、この目標2で、人間の体が、授精してから人体が
出来上がって、また色々な病気になって、補修しながら生きている。そういう流れの中

で、疾患というのは、ただ病気になるというメカニズムもそうだが、外的な病気もさることながら、中でどうやって治していくかというのは極めて面白い。免疫というのは特に重要な要素で、放っておいても、脳で考えてやっているのではなく、体の中で動いていく。例えば最近、特に幹細胞が自動的に病巣を見つけ出してやっていると。こういった幹細胞自身に脳があるのではないかというぐらいの感じがしている。したがって、ムーンショットとしては、免疫学というのを強くやっていただきたい。体全体のことをもう1回見直してもらふことになるだろう。特に今回のコロナの色々なことを見ている、一番大きな要素になっているのは免疫力と思う。なので、学問としての免疫学をもう少し強化してもらいたい。

古賀氏（JST） 申請書の中で、免疫系や、あるいは神経系と免疫系の関係、免疫系と各臓器系の関係など、そういう申請が多々ある。

江田氏 JSTの御説明に体制があったが、先ほどNEDOから御説明いただいたのと同じ名前で、似たようなストラクチャーでやっていくという理解でよろしいか。

河合参事官（内閣府） 実は目標ごとに、少しずつ研究のやり方とか、スコープの大きさが違っているので、完全にFA毎に同じ組織というわけではない。ここの部分も実はチャレンジングなところで、各FAの独自のやり方をやりながら、どういうやり方でやっているかは、必ずお互いに情報共有するようにしており、より良いやり方にいずれ収束していくのか、あるいは並列していくのかということも、競い合いながらやっていくという体制である。ただ、お互いが何をやっているかは必ず分かるように、横で連携をしている。

江田氏 先ほどのデータマネジメントなども、各省でいろいろ試しながら、新しい形を探していくという理解で良いか。

河合参事官（内閣府） データマネジメント、それからELSI、数理科学という、この目標に共通する部分は、いわゆる横串の課題として、これは内閣府も深くコミットしながら、できるだけ同じ基盤の上でやっていこうとしている。

佐藤審議官（内閣府） 本制度の運用・評価指針において、共通的に、例えばデータマネジメントなど、各ファンディングエージェンシーがやることが決めてある。一方で、私から非常に強くお願いしているのは、PDを支える、あるいは社会実装していくための体制をつくっていくことをお願いしている。そこについては、それぞれの独自性を許しながら、競争してやっていく。そういうような仕組みで現在のところは運営している。先ほど申し上げたとおり、2週間に一回ほど事務的な打合せをしているので、そこで必要な情報をお互いに開示し合っ、いいところは取り込んでいくというような、そういうPDCAみたいなこともやっている。

吉村氏 この手の分野は、やはりテクノロジーを追求しているような面白いスタートアップが、結構売り込みをされておられると想定していて、そのような人たちから注目されるプロジェクトであってほしい。こういったところに絡みたいと思われるようなも

のになってほしい。それから、場合によってはここから新しくスタートアップを生み出すようなことを含めて、新しい、若い人たちの知恵のようなものがうまく連携できる体制づくりを強く期待している。そういう意味ではJSTだけではという話が、私も少し頭によぎったが、国としての総合力でやっていただければと強く期待をしている。とても面白い話がたくさん載っていて、大変期待している。

古賀氏（JST） PMの下の各研究者レベルにも、若い人に入っていただくとか、PM自身も若い人もいるので、海外との連携も多分注目を浴びてくるだろうと思うので、そこら辺も連携してやっていきたいと考えている。

平座長 私からも幾つか。この目標1、2、3、6で、特に本当にスピード感が求められるところで、私が知っている限りでも、アバターなどはウィズコロナでフェーズが完全に変わっている。なので、そういうスピード感にしっかりついていかなければいけない。そもそも、この目標1と目標3の境界が解けてなくなる可能性もあるので連携をしっかりとやらしてもらいたい。さらに言うと、どれだけ社会実装できるところからやっていくかということだと思うが、常に規制がついて回るので、この法律が関わるところはとても時間がかかるので、先回りして法改正をするなり、レギュレーションをデザインし直すなりしなければいけないので、これは内閣府がしっかり見ながら、規制改革なのか、そもそも法律そのものを変えるのか、ここは戦略特区で進めるのかというのを、少なくとも2年前にやってくれないと、世界の競争に取り残される。なので、JSTのみならず、この科学技術・イノベーション部局と内閣府の規制改革部局と国家戦略特区部局と、よく連携をして、後れを取らないように進めてほしい。

増子審議官（文部科学省） JSTの体制に関する懸念があるということで、その辺、JSTがこの事業をしっかりと遂行できるように、文科省としても、JSTの所管省としてしっかりとウォッチして、体制を必要に応じて強化していきたい。

平座長 これはみんなで協力して補完し合うということなので、別に言ったからといって、それがマイナスということではないので、遠慮なく言っていただきたい。

BRAINから資料4-2に基づき説明後、質疑応答。

< 質疑応答 >

須藤氏 海外の参加状況が少し気になっている。もともとスタートするときに、結構海外の知見も多く入れようということで、国際シンポジウムを開催して、色々な人を集めてつくってきたはずだが、いざ公募をかけてみると、あまり応募がない。多分、今のご説明でもほとんどが日本の方だが、これは日本の中である程度クローズしてやるべきなのか、もっと広げてやらなければいけないのか。広げるのであれば、この段階で何かしておかないとまずいような気がするがどうか。

佐藤審議官（内閣府） 2つある。1つは、確かにPMについては少ないようだが、PI、

パフォーマーの方々については、かなりあると聞いているので、プロジェクトの中でも、実際にやられる方は海外との協力がある程度ある。もう一つは、実は別途、欧州や米国とは色々な覚書レベルのもの、あるいはネットワークづくりのようなものを内閣府が中心にやっている。既に欧州は大臣ベースで覚書を結んで、ホライゾンヨーロッパと協力関係を深めていくこととしている。したがって、この秋には、欧州との共同のシンポジウムなどもやろうということで、プロジェクト協力というのも含めて、国際的な協力をしっかりやっていくということを計画している。そういう意味では、現在、中での話とともに、外での話も進めているという状況である。

平座長 この案件は、また次回も議論するので、よろしければ終わりたい。本日は活発な議論に感謝する。

(5) 閉会

事務局から今後の進め方等について説明後、閉会。

以上